

平成26年度

特集

発掘調査された遺跡

遺跡の位置



国史跡 青谷上寺地遺跡

鳥取市青谷町

青谷上寺地遺跡では、「交易拠点としての港湾集落」の様子を明らかにするための発掘調査が継続して実施されています。今年度は、遺跡中心域西側低湿地の弥生時代から古墳時代の土地利用を検証するため発掘調査し、畦畔や道として使われていたと考えられる帯状の盛土がみつかりました。この盛土は古墳時代のはじめ頃（3世紀後半頃）のもので、芯に当たる部分に木で作られた構造物があり、低湿地でも崩れにくくなる工夫がされていました。古墳時代の低湿地の開発技術がわかる遺構です。

また、奈良・平安時代の帯状盛土が確認され、以前の調査でみつかった帯状盛土との位置的関係から条里地割の境界であると考えられます。

奈良文化財研究所写真室
中村一郎氏撮影
帯状盛土出土の勝示木簡



古墳時代の盛土(上)と盛土中の構造物(下)

下坂本清合遺跡

鳥取市気高町

下坂本清合遺跡は、鳥取市気高町内にある弥生時代の終わり頃から鎌倉時代まで（約1,800年～700年前）の集落跡です。弥生時代終わり頃の意図的に焼かれた竪穴住居跡がみつかり、建物の屋根がそのまま焼け落ちて炭となって残っていました。この住居跡を分析した結果、屋根は樹皮を主体にカヤを混ぜて葺かれていたこと、内装にはカヤが束ねて貼られていたことなど、通常は知ることが難しい竪穴住居のつくりが細かな点まで具体的に分かりました。

またこの他にも、弥生時代後期の、木の板で作った地中梁（建物の基礎）がよく残っている掘立柱建物跡や、丘陵の裾に列状に逆茂木を並べた防御施設が見つっています。丘陵の上には大規模な集落跡があると考えられます。



弥生時代終わり頃の焼失住居跡



弥生時代後期の地中梁

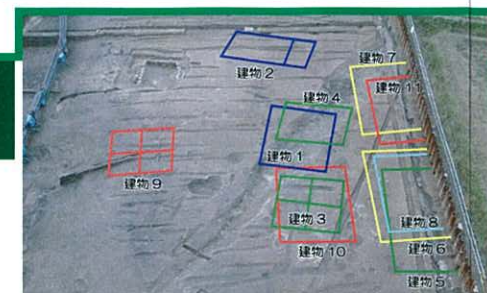


逆茂木を並べた防御施設

大柵遺跡 鳥取市

大柵遺跡は、縄文時代から中世の遺跡です。以前の調査から弥生時代から古墳時代にかけて大きな集落があったことが確認されています。今年度の発掘調査では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡や平安時代前半（9～10世紀頃）の掘立柱建物群、河川跡がみつかりました。

掘立柱建物群は総数27棟で構成されており、3～4回建物が建て替えられていることからかなりの期間この場所に建物が建て続けられたことがわかります。この建物群周辺からは和同開珎、承和昌寶、文字瓦、緑釉陶器といった貴重なものが出土しています。また、河川跡から墨書土器、人形などの木製祭祀具などもみつかりました。これらのことから、この建物群は古代の有力者の居宅と考えられます。



平安時代の掘立柱建物群跡



出土した和同開珎と人形
写真提供：公益財団法人鳥取県教育文化財団

松原田中遺跡 鳥取市

松原田中遺跡は、弥生時代から古墳時代（約2,200年～1,500年前）の集落跡と中世の水田跡が確認された遺跡です。弥生時代の遺構としては、弥生時代中期（約2,000年前）の水田跡があり、弥生時代前期から中期頃（約2,200年～2,000年前）の木器溜まりでは、未完成品の木製農具や容器などもみつかりました。

古墳時代前期（約1,700年前）の遺構では、地中梁がある掘立柱建物跡も確認されています。地中梁は、建物の柱を支えるために地中に太い角材を据え、基礎としたもので、この上に高床倉庫跡が建てられていたと考えられます。

また、古墳時代のもと考えられる「大足」も出土しています。この「大足」は水田で用いる農具と考えられ、松原田中遺跡では古墳時代の水田跡はみつかりませんが、弥生時代以降もこの遺跡で水田耕作をしていたことがわかります。



弥生時代中期の水田跡



古墳時代前期の地中梁

写真提供：公益財団法人鳥取県教育文化財団

会下・郡家遺跡 鳥取市気高町

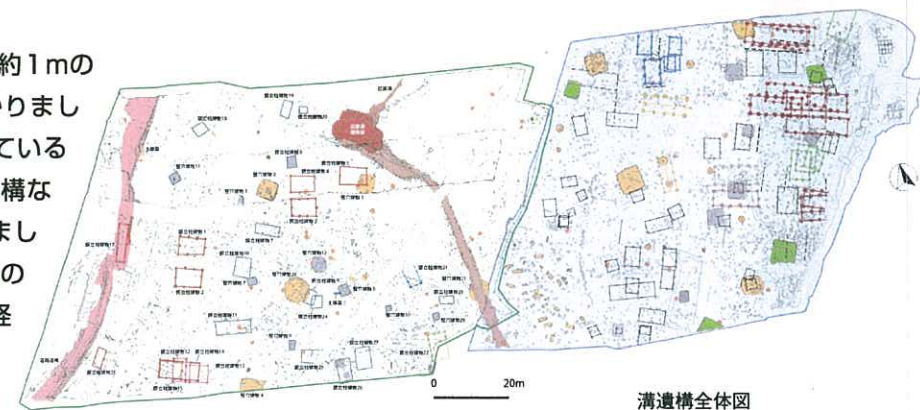
会下・郡家遺跡は、弥生時代（約2,000～1,800年前）の集落跡と平安時代（10世紀頃）の役所に関連する遺跡で、多数の遺構が見つかりました（下図）。弥生時代の遺構の中には、特別な建物である「独立棟持柱建物跡」があり、その大きさは県内最大のもです。この建物の存在が、当時拠点的な集落であったことを物語っています。

また、平安時代では、柱穴の直径が約1mの大型の掘立柱建物跡が11棟も見つかりました。この他にも大型建物群を区画していると推定される溝跡（区画溝）・道路遺構なども確認され、全体像がわかってきました。大型の建物群は、古代気多郡地域の経営や管理を機能の衰えた郡役所を経由せず因幡国府が直接行うための出先機関であったと推定されます。



出土した刻書土器
(文字が刻まれた土器)

出土した土製支脚と壺
(煮炊きの道具)



溝遺構全体図